

開発教育とESD、そしてSDGs

今回の紙上インタビューは、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）進藤様にお伺いしました。ACCUは、教育と文化の振興により、持続可能な社会の構築に貢献する活動をされています。今回は特に、持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）やユネスコスクールについて、「開発教育」との関連に着目してお話を伺いました。皆さまの今後の教育実践の参考になれば幸いです。

Q1) ACCUの教育分野での取り組みについて簡単に教えてください。

ACCUは、ユネスコの基本理念に基づき、多様性の尊重と寛容で平和な持続可能な社会の創造をめざして、教育現場・地域や国内外のパートナー団体と共に、相互理解と学びの基盤づくりを促進しています。

Q2) 開発教育とSDGs、ESDとの親和性について、実践例があればご紹介ください。

また、開発教育を実践しようとしている方に、持続可能な社会の構築という視点を活かすためのアドバイスをお願いします。

持続可能な開発のための教育（ESD）は、持続可能な開発目標（SDGs）を構成する要素の一つであり（※1）、ESDと開発教育は親和性があるという以上に、同じ土俵で語られる必要があると考えます。教育は一つのセグメントとして語るもの、あるいは取り組むものではありません。ゆえに、ESDの実践者がESDだけに取り組んでいるわけではなく、また、開発教育の実践者が開発教育のみに特化しているわけでもありません。すべてのセグメントはお互いに関連づけて語られるものであり、その実践もまた関連づけて行われるものです。

例えば、ユネスコスクール（ASPnet）（※2）はESDの推進拠点として位置付けられており、各学校の取り組みはユニークです。地域学習を例にすると、自分の住んでいる街を知ることからコミュニティとつながった、あるいは、地元の世界遺産を取り上げてテーマ学習を行うことにより、平和、環境保全など深い学びへとつなげた事例もあります。このように、「ESDの視点を既存のカリキュラムの中に組み込む」ことで、既存のカリキュラムを超えた子どもたちの学習の場につなげていくことができます。これは、持続可能な社会を創造するための学びの場を形成していくことに他ならないのです。そのような場で、地球規模の課題に取り組む体験を積み重ねていくことが、正に開発教育の実践の基礎となるのではないのでしょうか？

ものごとをセグメントでとらえて語る時代は過ぎました。開発教育もしかりです。すべての事象は単発で起きているのではなく、さまざまな要因が絡み合って目に見える事象となっています。そうしたとらえ方をESDは教えてくれます。また、ESDがSDGsの中に明記されていることは、その流れを反映していると言えます。

こうして考えていくと、地球規模の課題解決のヒントは、実は足元（ローカル）にあることが見えてきます。足元の教育現場を見直してみると、地球規模課題の解決への糸口を見出すことができ、開発教育の実践者にとっても多くの学びがあるように思われます。

※1 ESDは、SDGsのGoal 4.7に位置付けられています。SDGsのGoal 4.7では、2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにすることを目標としている。

参考：<https://www.unicef.or.jp/sdgs/target.html>

※2 ユネスコスクール（ASPnet）：

ユネスコスクールは、1953年、ASPnet（Associated Schools Project Network）として、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的な試みを比較研究し、その調整をはかる共同体として発足。世界182か国で11,500校以上がASPnetに加盟して活動している。

参考：<http://www.unesco-school.mext.go.jp/aspnet/>